

信仰の在り方

信仰は元より自分と父なる神と其独子なるイエス・キリストの間に与えられた御恩寵であります。それ故に先ず自己の信仰のハッキリしたところから信仰生活が営まれるのであります。然し又自分独りで暮しているのではないから信仰生活はそのま生きている社会と社会生活即ち其家庭に、その環境に、その民族に、その国に、又この世界に、深い関係があるのであつて單的にいえば敗戦日本に日本人として日本青年としての信仰生活の在り方が必然的に営まれて居らなければなりません。信仰生活は決して修道院の生活の様に社会から離れ、これを傍觀しながら、独自の生存をつづけて行くものではありません。

私達は皆キリストに捉えられ、キリスト・イエスを信じて信仰生活をしているのですから、誰もその信仰の方向は同一であり、その目的も同一であります。けれどもその人その人によつて、信仰の理解に於て、信仰の進歩に於ては、其場が同一ではありません。それ故に、私達は自分の信仰によつて自ら判断した信仰生活があるのであつて、ただいたずらに他人の真似をしたり、形式のみを主にして、謙遜を失つたりする無意味な行動があつて

はならないのであります。それはカソリックであります。

基督者の信仰に三つの誤った型があります。その点を私達はよく弁えて居なければなりません。第一は、自分はいつ迄も不完全であつて常に悔改めの連続をもつてこの世を終るのが信仰生活であるとしている者、即ちいつ迄も不完全で完全な救いを求めて不安の日を送るものであるとする者。第二はその反対で救は凡て神とキリストの側にあるのであるから、それを信じて居るだけで他の一切の自分の行為や精神は不必要である。我らの救いは完全で救いから洩れるものではない。絶対の安心を持つべきで少しでも不安があるのは不信仰であるというもの。第三は救いは神に於て完全であるが、全く我が身が潔められる迄は不安の日が続くのであつて、全く清くなる迄努力して、その潔きに至つて救いは全くなるとするものである。以上三つの信仰は、決して聖書に示されている信仰の在り方ではありません。もう一度ピリピ書第三章九節・十五節までを読んで見るならば、眞のクリスチャンという者は神の救いの聖業の完全なることを絶対に信ずるものである。其点不安は何もないけれども、同時に自己の不完全さを一層深く自覚し己が内にキリストの形成る迄、神の完全な救いを己が内に実現する様に努力してやまないもの「唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召し給う召にかかわる褒美を得んとて、之れを追求む」るのである。今我らは完全に清められているのではなく、清められる必要がないのではなく、何時清められるか不明であると言つのではなく、信仰に於て完全なる平安を持ちつつ、現実には恐れおののき、おのが救いを完うせんとしている事が、クリスチャンの信仰であります。ルッターの申しました様に「クリスチャンは出来上つた者ではなく、出来つつ

あるものである」というのが本当の姿であります。

即ち、神の完全な救いに対して、全き信頼を持ちつつ不完全なる自己の肉を殺してこれを打ちたたきながら猛進して行くその全過程に於て、クリスチャンの信仰生活と全き信仰の人格が成り立つのであります。キリストの救いに対して、徹底的な信頼を持たないものは不信仰であり、神は義とし給わない。然しこれを信じたからといって、既に自己がその凡てを獲得した様に思つて自己の努力をしないものは、神を救いの方便としているもので、真の信仰ではない。神を絶対に信じつつ、今日も明日も、血みどろの信仰の闘いをもつて前進する者がキリスト者であります。

青年諸君、我らは本物の信仰に生きなければならない。オリンピック選手が決勝点に向かう時の心の状態を思つてみる事が出来るでしょう。我らは信仰の馳場をそれ以上の真剣さ、緊張、挫けない勇氣と意氣とをもつて力強く走っているのではありません。昨日のことは忘れて明日の行程に全速力をもつてなし得る限りを為して走らねばならない。即ち、走り終つた過去が何であれ忘れて了つて、自体を前に伸し足を高くあげて突進することであります。自分の誇りも、罪も、受けた迫害も、も早、いつ迄も氣にしたり顧慮したりすることなく、只前進あるのみという生活であります。いつの祈りにも悔改めは大切であるが、それ以上に罪赦されて雄々しく立上つて、使命感に生きるのがクリスチャンであります。自分の肉の誇りや、此世の享樂を捨て切らずして悩む果て強がりをするのも愚劣であるし、自分の過去の罪や過失を思つてメソメソと意氣銷沈して戦々慄々（きょうきょう）、自己反省も結構だが何時も懺悔型の人間、熱いか寒いか分らないお天氣の七面鳥の様な人間でも困る。キリスト者の態

度はそんなものであつてはならない。私は諸君が、神に捉えられ、キリストに選ばれた選手たるの自覚をもつて生きて貰いたいのであります。信仰の闘いを雄々しく闘うキリスト者であつて欲しい。キリスト者は神に向つては恐れ戦き、消極的の事もあるがこの世と人に対しては常に積極的でなければならぬ。私は信仰生活の原理的のことを述べたいのであるけれども話を一步現実の問題に進めて行きたいと思ひます。

この八月十五日は日本完敗の日であります。昭和二十年八月十五日から丁度足かけ五年目満四年の歳月が閲せられたのである。而も相変わらず、米国の居候であり、八千万人の俘虜生活であり、米ソの間に挟まれた、サンドウィッチ生活であります。而も内に蔓延（はびこ）るものはニヒリズムの廢類思想と、共產主義の唯物思想であつて、共に神なきを誇りとする思想であります。全くクリスチャンの信仰と正反対の者が祖国に蔓延（はびこ）つていると申して過言ではありません。「我はしばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者多ければなり。彼らの終りは滅亡（ほろび）なり、己が腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事のみを念ふ」というパウロの言葉こそ、ピッタリと今の日本を指して我等に示して居るのではないでしょうか。「兄弟よ、汝ら諸（もろ）共（とも）に我に倣う者となれ、且つ汝らの模範となる我等に従いて歩む者を視よ」とパウロは私達に迫つていつていたのであります。ニバー教授も申されている様に、少くとも共產主義者の真面目なる人達は決して自分の事のみを考えていない。彼等の社会原理と經濟原理と政治原理に立つて、あくまでも、社会の不正不義と、社会の困窮者、働く者の味方として、所謂闘争をもつて共存共栄の社会を現出せんとしている努力と生活は愚かでも光の子なのであります。然らば、我等キリスト者は光の子として彼等より以上の使命と責任を日本人として、この惨め

な祖国に生きる者として持たない筈はない訳である。神の教会は福音を宜べ伝える所であると共に「己れの如くその隣を愛する」その愛の実践の社会でなければならない。社会のセンターとして世の重荷と十字架を負うべきものが、我等の群でなければならない。我等は政治的に、経済的に、世に活動すべきものではないけれども、少なくとも同胞の墮落、腐敗、道義の廢類と悲惨と不義に対しては、神につける活動があるべき筈であり、特に、平和問題に関して、戦争放棄に対して、少くとも再び、日本民族を過（あやま）たしめぬためには、血を流し死をもつてもこれを救うべき大責任を持っていると信ずるのであります。全く新しい日本を造るために、平和な日本を生む為に、平和な世界となる為に、どれだけ真剣な研究と、自己の見識が養われているか。その為に、自分の生涯の設計を如何に考えているか、平和な日本、無抵抗の真理をもつて日本を守り、道德再武装（M・R・A）を本当に祖国のものにするのには如何に活動しなければならないか。その指導者ほクリスチャン以外にない事を果して自覚して居るか。ここに会する諸君の全部が伝道者になつても教育者になつても、指導者になつても、とてもとても日本を救う實力とはならぬ位の大問題であります。百年二百年の歴史の彼方に於て、成就すべき目標なのであります。然し、この目標は成就しなければならない。大いなるスケール、神の計画として成就しなければならないのであります。「全日本をキリストへ」と云つのが五十年計画の伝道の目標であり「天の門」は日本に開かれたのである（何十万の犠牲と原子爆弾に由つて）キリスト者こそこの責任者である。絶対の正直、純潔、愛、無私、この四つのものがオックスフォード・ムヴメントとして米国フィラデルフィアの牧師フランク・ブックマン氏によつて一九二一年に提唱されて以来、今日はM・R・A運動として第二次世界大戦後大い強調され、スイス

に開かれているのであるが、今の日本にはこれを受けるだけの精神的靈的な準備は何もないのである。もし、これに呼応出来るとする者ならば、不完全ながら我等キリスト教会のみであると私は断言します。日本に欠けているもの、教育勅語にも無かったもの、神道にも仏教にも欠けているもの、そして今の社会に全く無いもの、それは正直、純潔、愛、無私、の四つであります。これは単なる徳目ではない。所謂道德でもない。それは神に交わる事の出来る、神中心の社会にのみ通用する。キリストの教会にのみ現存する無上の価値であります。天に属する、美しい靈の結ぶ所の実であります。悪魔とその世界、肉慾と悪の世界には咲かない花であり、実であります。今の世は正直者は馬鹿を見、正直は決して通用しない。今の日本の巷には純潔は無い。青年男女の貞操観念、酒や煙草に対する潔癖は日本のピュリータン的な教会性格から消えつつあります。金銭上の間違いや、利を貪ること 流職は茶飯事であります。清廉潔白という日本文字は辞書から抜けて泥に塗れている。肉欲の愛工口スは、肉体文学となり、愛なき世界、虚無、ニヒリズムは文学の根底に横たわっている。神の愛、キリストの愛（アガペー）購罪愛は日本の何処にあるか。戦災と引揚げとに苛まれた同胞を己の如くその隣りを愛することが行われているか。徒らに徒党を組んで闘争をもつて愛の運動となっているのが現状ではないか。私無き行動、私無き生活が成り立つか。自分が生きて行くのにやっとではないかと弁解している。而も酒や淫楽に消え去る金は何百億円を数えている。安本計劃は決して進まない。不平不満は自暴自棄の世相を示している。かかる日本、祖先の国を見て、かつてエルサレムの滅亡を予見して涙を流し給いしイエス・キリストを信ずる我等、キリスト者、若き血に燃ゆる諸君が腸を注ぎ出ださずして可なるやであります。祖国を愛し、キリスト・イエスが我等を

愛し給いし如くに隣人を愛することこそ、神の誠としている。我等は果してこのままでよいのでしょうか、日本のキリスト教会の現状についても、私には意見がある。国際キリスト教大学を初め、ミッション・ボードの活動に対しても私には憂いがある。頼むべきは只主イエス・キリストと我が愛する北一条教会特に諸君である。六十年の歴史を持つ我教会の信仰の伝統こそは神の示し給いし正統のものであります。聖書と聖霊の示し給いし信仰であると信じているのであります。

諸君、信仰を新たにして戦闘の教会とならねばなりません。祈りに赤々と炎燃ゆる教会とならねばなりません。毎聖日礼拝に勢揃いして神の言とキリストの恩寵とを頂き、固き信仰をもって、社会の職場に打って出なければなりません。祈り会に皆顔ばかりでなくその信仰と性格とを識り合い、本当に相愛し相扶け合わねばなりません。男子も女子も一つとなり、希くば信仰の家庭を与えられる位の信仰による一致をもって、その分野にキリストの為に働くものとならねばなりません。

メソメソと己の罪に泣くよりは、キリストの救いを信じて、信仰の馳場を走り、祖国の救いの為、隣人への愛の奉仕に残る生涯を捧げねばなりません。これが、信仰生活の在り方であります。我等の夢は大きい。小さい自己中心の夢は捨てよ。キリストに由る働きに生きよ。これこそ信仰の在り方であります。無防備平和日本を築くものはクリスチャンの外には絶対にはありません。神は我等の祈りを聴き給う。

諸君、面白おかしく暮しても、たかが五十年の人生、何かあらん、である。永遠の生命なるイエス・キリストに生きる道こそ、信仰生活の祝福である。

「己が生命を救わんと思つ者はこれを失い我が為に己が生命を失うものは之れを得べし」という聖言を我が生涯とするのが信仰生活であります。

(一九四九年八月二日、野幌に開かれた青年会修養会にて)